

大屋敷C古墳群 発掘調査

— 現地説明会資料 —

浜松市文化財課

2024年10月19日

1. 大屋敷古墳群について

浜松市浜名区宮口の亀玉中学校周辺の丘陵斜面や段丘上には多数の古墳が築かれており、大屋敷古墳群と総称されています。大屋敷古墳群は分布状況からA古墳群、B古墳群、C古墳群の3群に分けられており、古墳の数は把握できているものだけでも100基以上にのぼります。また、さらに東の尾野地区や根堅地区の丘陵斜面にも多くの古墳が築かれ、その総数は350基以上にのぼり、浜松市内でも屈指の古墳密集地帯となっています。

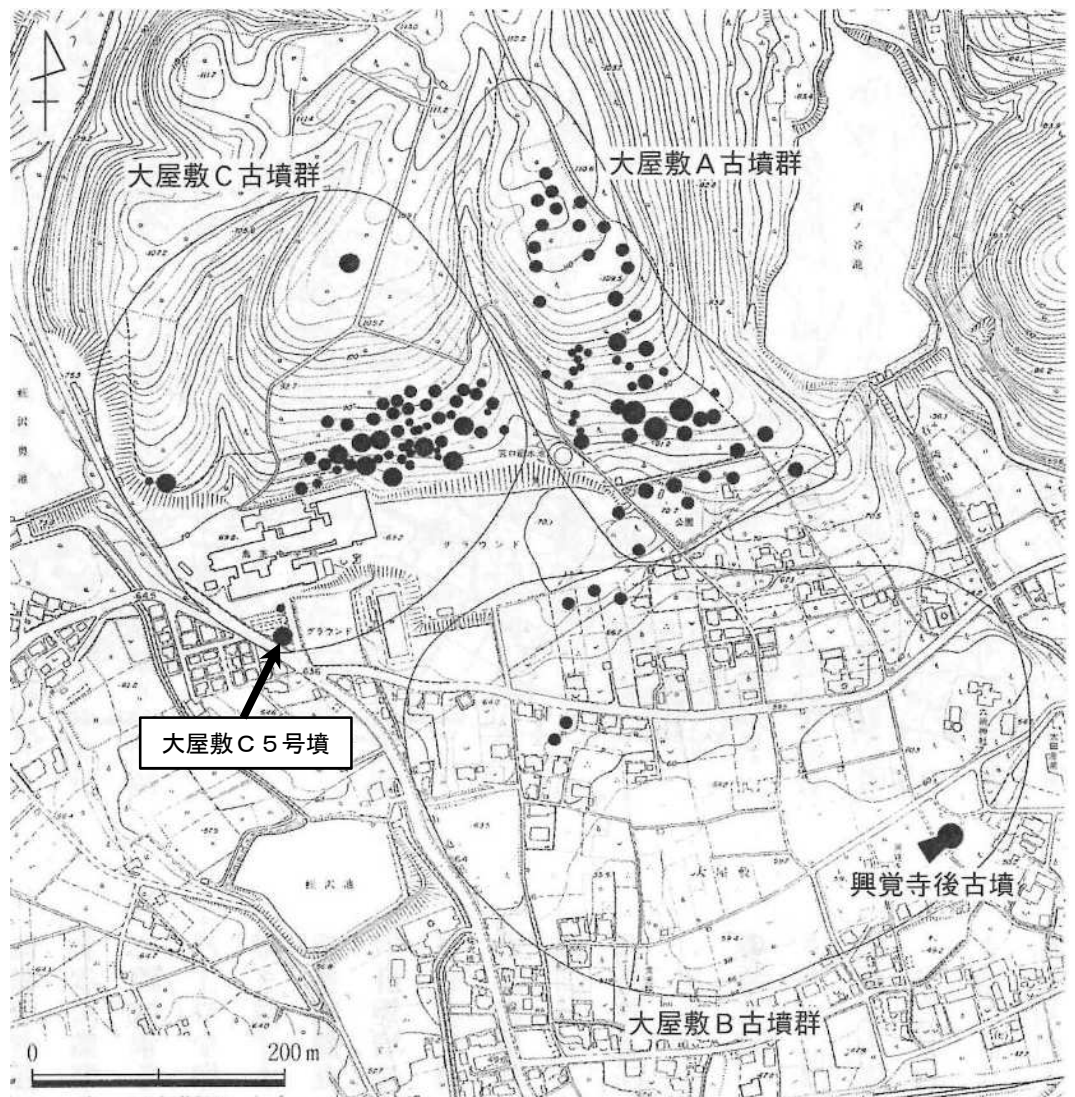
古墳群の南端には、全長35mの前方後円墳である興覚寺後古墳が立地しています。後円部には全長8m、幅2.4mの片袖式の横穴式石室が構築されており、過去に行われた発掘調査では須恵器のほか馬具や鉄刀、鉄鏃などの武器、玉などの装身具が出土しています。6世紀前半に築かれたと考えられ、市内の古墳で横穴式石室を導入した初期の事例の一つと捉えられています。

群内では、浜名高等学校による発掘調査や浜北市教育委員会による発掘調査が複数回実施されて来ましたが、国道362号バイパス建設に先立ち、2000年から2005年にかけて財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所によってA古墳群とC古墳群の発掘調査が行われ、合計113基もの古墳が調査されました。

古墳は、古墳時代後期から終末期（6世紀後半から8世紀前半）の横穴式石室を伴う直径10m前後の小型の円墳が密集して築かれており、群集墳を構成しています。

横穴式石室は、「胴張り」と呼ばれるアーチを描く形状をしており、愛知県の三河地方の石室と共通した特徴をもっています。

多くの古墳の石室内は、発掘調査前に盗掘を受けていましたが、調査の結果、須恵器・土師器等の土器や玉などの装身具、鉄製の鏃や刀、刀子、釘が出土しています。



大屋敷古墳群の分布 亀玉中学校周辺の丘陵斜面や段丘上に多数の古墳が築かれている。

2. 大屋敷C5号墳の発掘調査について

亀玉中学校の敷地内には大屋敷C4号墳とC5号墳の2基の古墳が残されていますが、このうちC5号墳の一部が道路改良（拡幅）工事の対象範囲になったことから、工事に先立ち9月から発掘調査を実施しています。発掘調査前のC5号墳は、西側の一部が道路により削られているものの、東西12m、南北11m、高さ2mの墳丘が残っており、中学校北側の古墳とは異なり墳丘の中央に盗掘坑が確認できないことから、横穴式石室を含めて良好に古墳が残っていると当初は考えられていました。

発掘調査は墳丘上の樹木を伐採し、墳丘の断面を観察しながら徐々に墳丘を掘り下げて、横穴式石室の存在が想定される墳丘の中心部の調査を進めて行きましたが、古墳の中央付近は大きく破壊された痕跡があり、墳丘は後世に古墳の形を整えるため新たな土で埋めて盛土をしていたことが明らかになりました。横穴式石室は大半の石材が抜き取られて原型を留めておらず、僅かに石室の入口と推定される場所に石材が残っていましたが、石材の置き方や方向が不自然であることから、この部分も後の時代に改変を受けている可能性が高いと考えられます。C5号墳がいつ、なぜこのような破壊を受けたのか明らかではありませんが、中学校の敷地内に存在することから校庭の一部として形を整え直して整備をしたと推定されます。

遺物は周溝などから須恵器の破片が少量出土しましたが、横穴式石室が存在したと想定される範囲からは出土しませんでした。また、墳丘の盛土中から縄文土器や石器など縄文時代の遺物が混じって出土しており、古墳の下に縄文時代の遺構が存在すると考えられます。今後、工事範囲内の墳丘の解体調査を進め、古墳の下に埋没している下層遺構の調査を行い、10月中に全ての発掘調査を終える予定です。

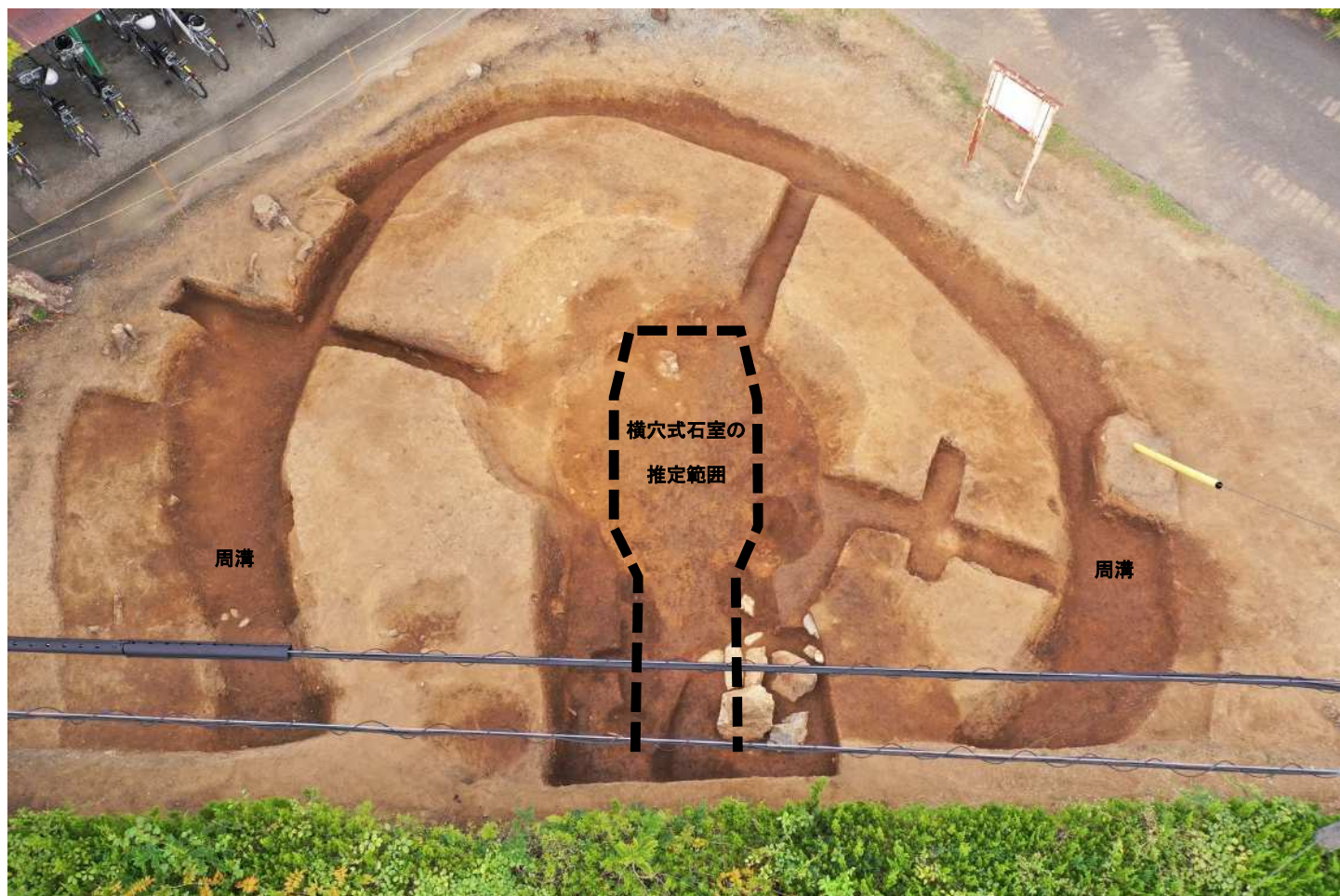


調査開始直後の様子 墳丘上には多数の樹木が生い茂っていたため、切株の撤去に苦戦した。



古墳中心部の調査状況 当初の予想に反し、横穴式石室は大きく破壊されていた。

大屋敷C5号墳全景 古墳の中心部は大きく破壊されていたものの、古墳外周に掘られた周溝は良好に残っていた。背後に写る丘陵斜面には、同時期の横穴式石室を伴う古墳が築かれた北新屋B古墳群や、平安時代の灰釉陶器生産窯である大屋敷古窯跡が立地する。



上空から見た大屋敷C5号墳 古墳は直径約10mのやや歪な形状の円墳で、南西に向かって石室が開口していたと考えられる。石室全体が大きく破壊を受けているが、一部に石室の石材を抜き取った痕跡が確認できた。



石室入口付近の石材 縦長に置かれた石材は、石室の入口にあたる羨門の立柱石と思われるが、本来土砂を充填する裏込めにあたる場所に、角礫を置くなど不自然な石材配置であることから、後世に改変した可能性が考えられる。

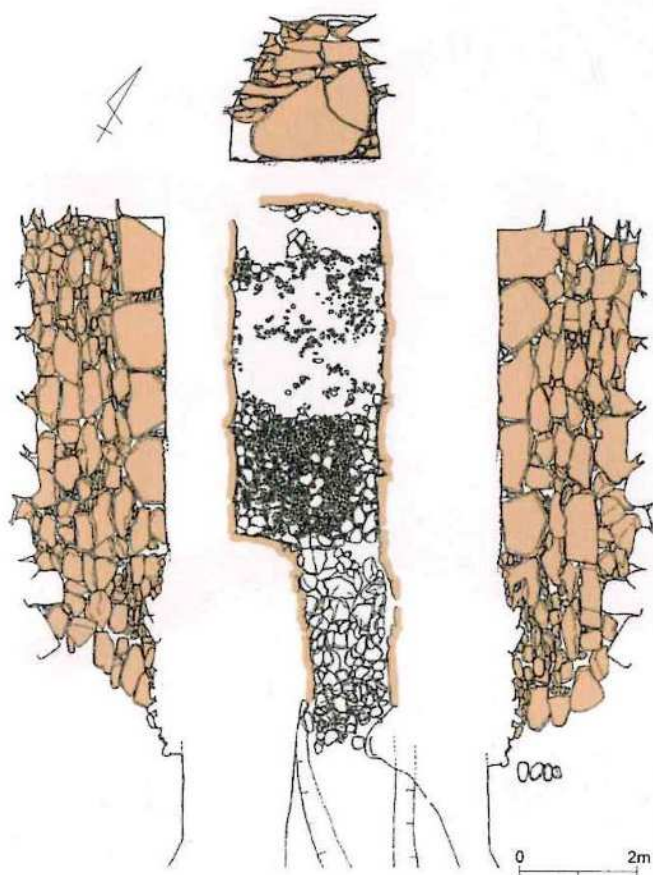


墳丘外周に掘られた周溝 古墳と周囲を区画するために掘られた周溝はほぼ全周にわたり良好に残存していた。墳丘は盛土によって構築されており、周溝を掘削した際に発生した土砂も盛土として活用した。

こうかくじうしろ
興覚寺後古墳（市指定史跡）

Map
60-F

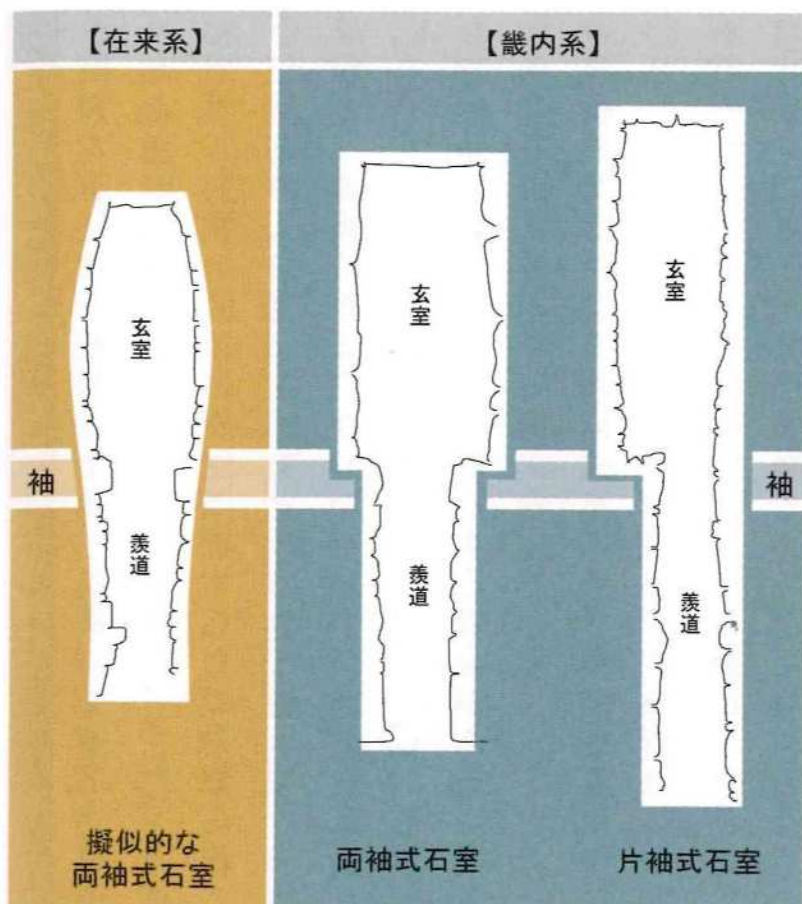
浜名区宮口にある全長三五mの前方後円墳である。後円部の中央に畿内系の片袖式石室が構築されている。石室の全長は八m、玄室の長さは五・六m、幅は二・四mである。副葬品には、馬具や鉄製武器、装身具、須恵器がある。副葬品の特徵から、六世紀前半に築かれたものとみられ、市内でも最初に横穴式石室を採用した古墳と考えられる。



興覚寺後古墳の石室

興覚寺後古墳 石室

横穴式石室の諸形態 大屋敷古墳群では、興覚寺後古墳で片袖式の畿内系石室が構築されているのに対し、群中の古墳の大多数は在来系の石室が構築されている。在来系の石室の特徴には、愛知県の三河地方の石室と強い共通性が認められる。多様な石室形態は当時の地域間交流や社会背景を示している。



～ ご見学にあたってお願い ～

- ◆現場内には凹凸がありますので、足元には十分ご注意ください。また、学校敷地内になりますので、定められた場所以外への立ち入りはご遠慮ください。
- ◆報道や市の刊行物、SNS等で現地説明会の様子を公開する場合がありますので、ご了承ください。
- ◆現場の撮影は可能ですが、撮影された画像や映像等を公開する際には、他の来場者の方のプライバシー保護等に十分ご配慮ください。